

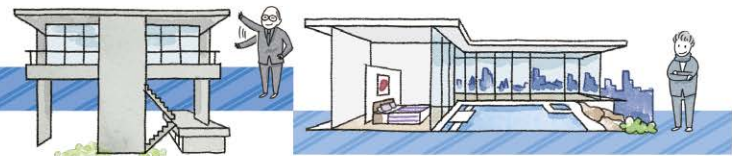
リビング・モダニティ



住まいの実験 1920s-1970s



ガイドブック



LIVING MODERNITY



EXPERIMENTS IN THE EXCEPTIONAL



AND EVERYDAY 1920s-1970s



芸術の館



兵庫県立美術館
HYOGO PREFECTURAL MUSEUM OF ART

リビング・モダニティ 住まいの実験 1920s-1970s

会 期

2025年9月20日(土)～2026年1月4日(日)

休館日：毎週月曜日

※ただし10月13日(月・祝)、11月3日(月・祝)、24日(月・振休)は開館、
10月14日(火)、11月4日(火)、25日(火)、12月31日(水)、1月1日(木)は休館

開館時間

10:00～18:00

※入場は閉館の30分前まで



会 場

兵庫県立美術館 企画展示室

主 催



兵庫県立美術館

日本経済新聞社

お問合せ

078-262-1011

美術館ホームページ

<https://www.artm.pref.hyogo.jp/>



リビング・モダニティ 住まいの実験 1920s-1970s ガイドブック

企画・編集：国立新美術館 教育普及室(柴澤 希)
イラスト・執筆：イスナデザイン
(野口 理沙子・一瀬 健人・高松 えみり)
デザイン：富岡 克朗
発行：兵庫県立美術館(神戸市中央区臨海海岸1-1-1)
発行日：2025年9月20日

©2025 兵庫県立美術館

※本ガイドブックは、国立新美術館 教育普及室が企画・編集した内容の一部を変更し、
許諾を得て掲載しています。

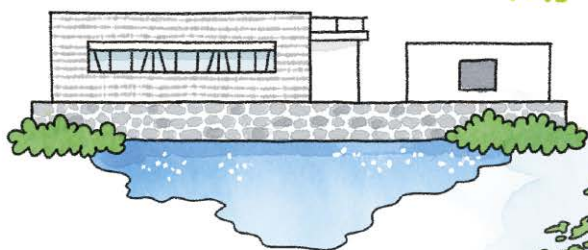
芸術の館



兵庫県立美術館
HYOGO PREFECTURAL MUSEUM OF ART

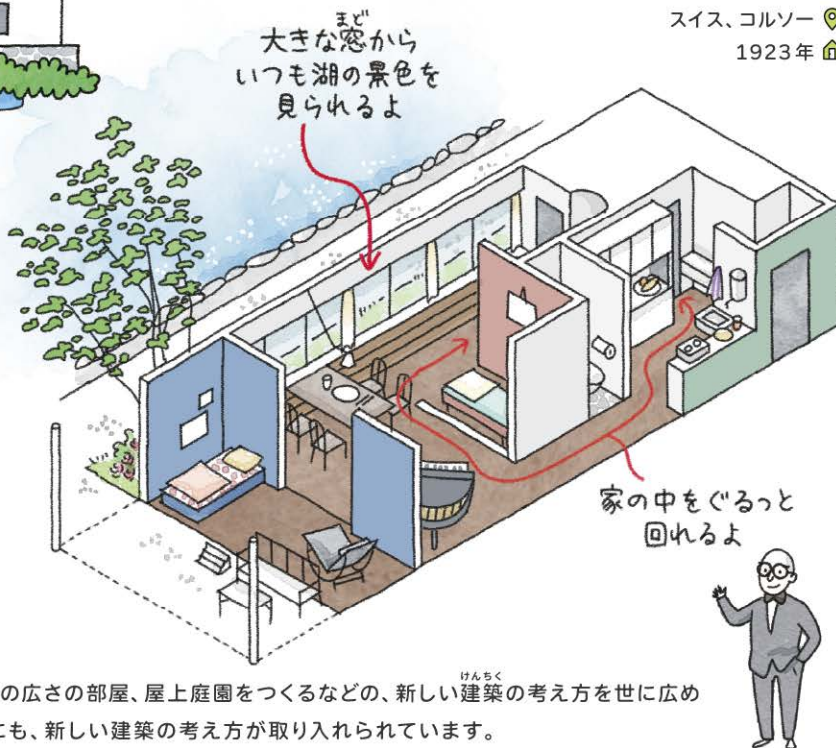
湖や山々の風景を取りこむ家

ル・コルビュジエ
スイス、コルソー
1923年



POINT

技術の進歩で、大きな窓をつくれるようになり、家の中に風景を取りこむことができました。

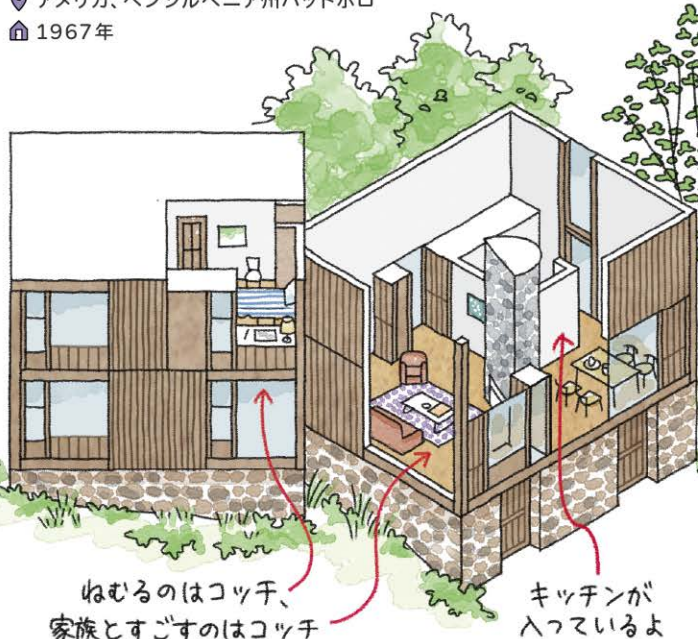


この家の設計者は、大きな横長の窓や思いどおりの広さの部屋、屋上庭園をつくるなどの、新しい建築の考え方を世に広めました。彼が両親のために建てたこの小さな家にも、新しい建築の考え方が取り入れられています。

ルイス・カーン

アメリカ、ペンシルベニア州ハットボロ

1967年



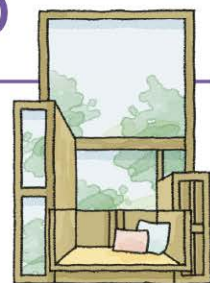
窓が2つ、
2つの箱で
できた家の
いくつも
あったの



POINT

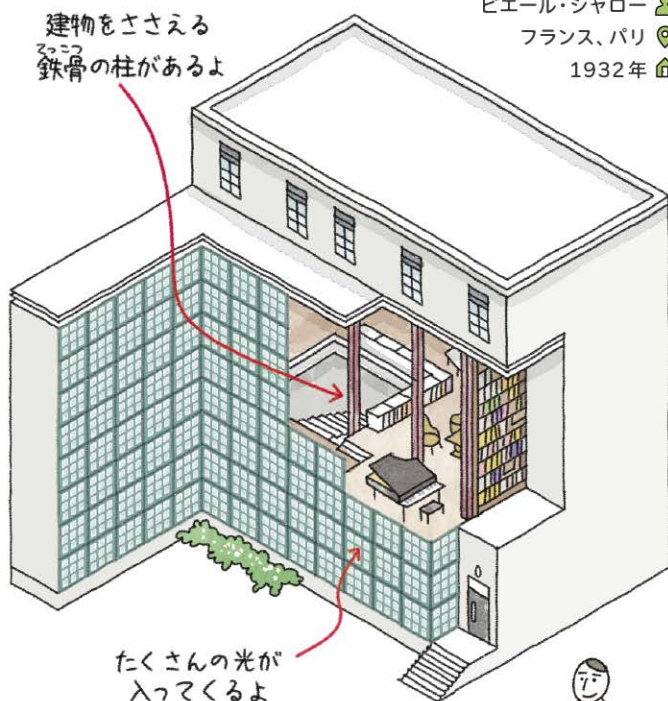
この家は2つの箱を45度ずらして組み合わせた形でできています。ひとつは家族が集まるリビングキューブ、もうひとつは、ねる部屋があるスリーピングキューブとよばれています。家の形はシンプルですが、ガラスの窓や少しくぼんだ窓がある表情ゆたかな家です。

景色を見るための窓、空気を入れかえるための窓、ベンチと一体になった窓など、さまざまな目的の窓がつけられています。



ピエール・シャロー
フランス、パリ
1932年

建物をささえる
鉄骨の柱があるよ



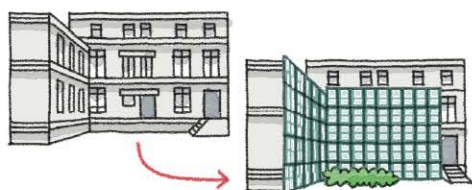
たくさんの光が
入ってくるよ



光があふれる 大きなガラス壁の家

POINT

古いアパートの一面の壁をはずして、
ガラスブロックでおおう工事によって
建物が生まれかわりました。

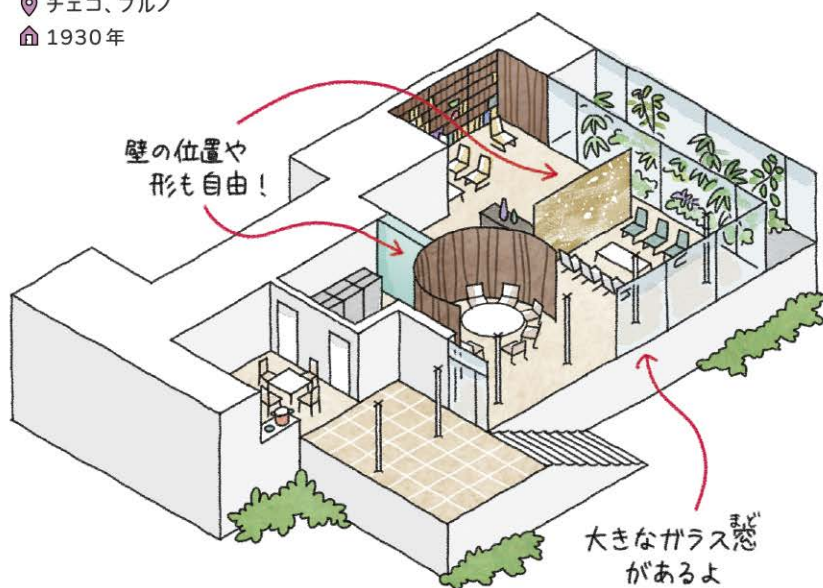


光あふれる空間は建築家たちの夢でした。この家はもともと窓が小さくて壁があつたアパートでした。家の中に光を入れるために、鉄骨の柱で建物をささえながら、1階と2階の壁をはずして、ガラスブロックにかえました。大きなガラスの壁を通して光がさしこみます。

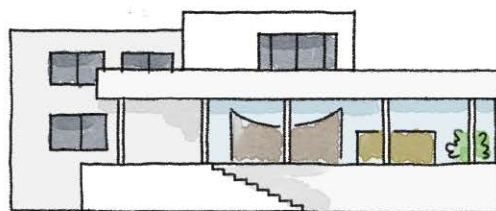
ぶあつい壁から解放された自由な家

ルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエ
チェコ、ブルノ
1930年

壁の位置や
形も自由!

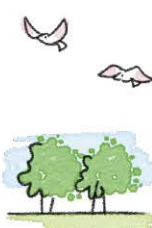


大きなガラス窓
があるよ



POINT

柱は細く軽やかに
見せるために十字の
形で、さらにまわり
の景色がうつりこむ
ように鏡のような
加工をしています。



それまでヨーロッパで建てられていたのは、小さな窓がついたあつい壁の家でしたが、この家は柱を立てることで、壁をうすくできて窓も大きくなりました。また平らな屋根とシンプルな形、使いやすさも特徴です。

たくさん建てることのできる細い鉄骨の家

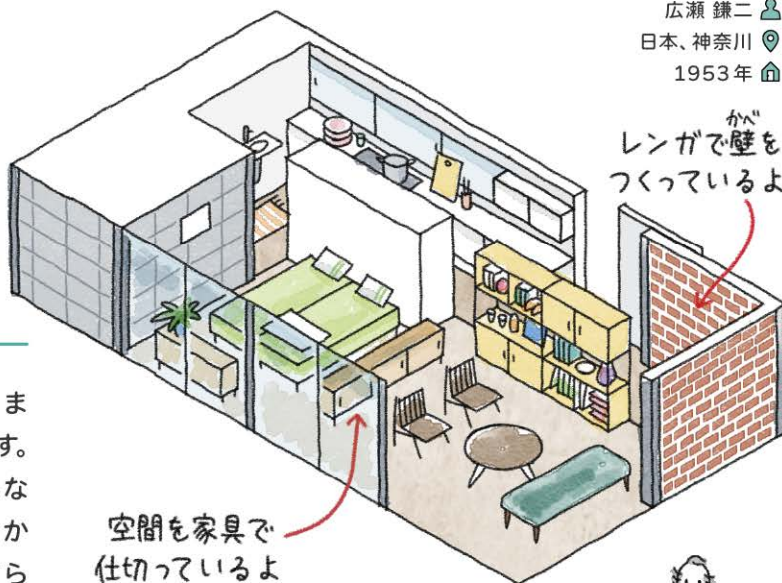
広瀬 鎌二
日本、神奈川県
1953年



POINT



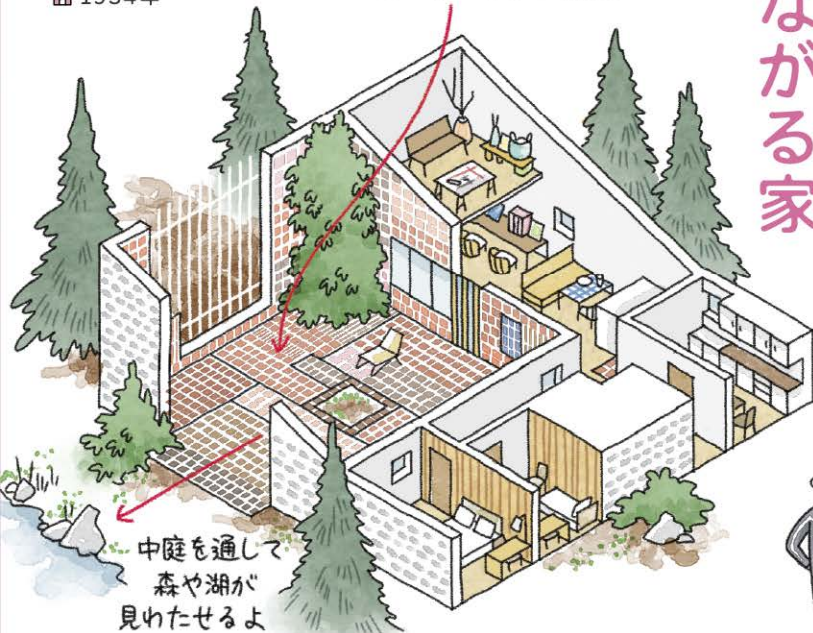
設計者が自分の住まいとして建てた家です。組み立てがかんたんな材料を使って大がかりな工事なしで建てられています。



この家の設計者は、かんたんに建てられる鉄骨の家を広めるために、それまでビルなどで使われてきた鉄骨と、安くて手に入れやすい部品の組み合わせを考え、短い時間で組めるよう工夫をこらしました。むだがなく、数多く建てることのできる鉄骨の家は、その後、各地で建設されるようになりました。

アルヴァ・アアルト
フィンランド、セイナツツアロ
1954年

いろいろな
使い方ができる中庭！



はるかな森や湖と
つながる家



POINT

少しはなれたサウナの小屋や、森の小道、湖の船着き場もいっしょに考えながら家をつくることで、土地全体を使ったくらしを目指しました。

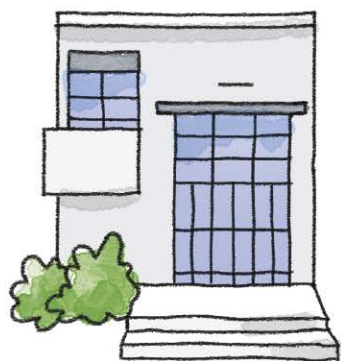


実験住宅という名の通り、この家では建築家が新しいアイデアをためしました。たとえば、家の外がわは白くぬられた壁ですが、中庭の壁や床は何十種類ものレンガや色のついたタイルなど、さまざまな材料によってつくられました。

広瀬 鎌二

ムーラツツアロの実験住宅

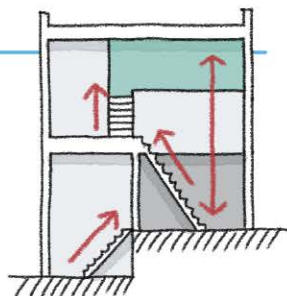
アルヴァ・アアルト



高さの違う 床と階段で つながる家

POINT

少しずつずれた床と階段によって、立体的に部屋をつなげている、スキップフロアといわれる空間です。



ふきぬけでタテに
広く感じるよ

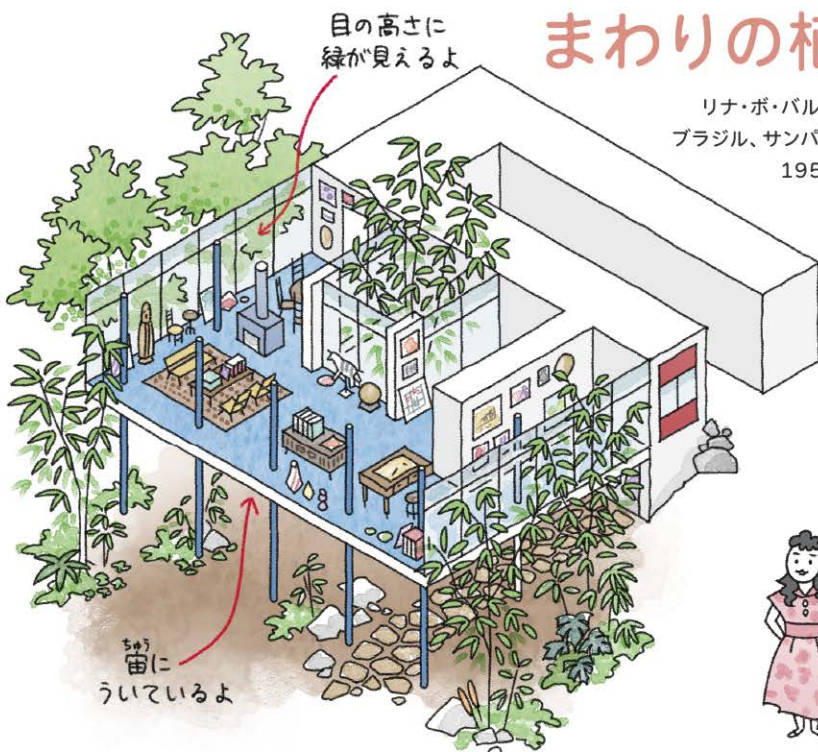
階段で
つながっているよ



この家は海外の新しい建築の考え方を日本に取り入れることを目指してつくられました。鉄骨で建物をささえるドイツではじまった建て方を木造建築でためし、外がわはシンプルな白い箱型で、家の中には使いやすい空間にするための工夫があらこちらに見られます。

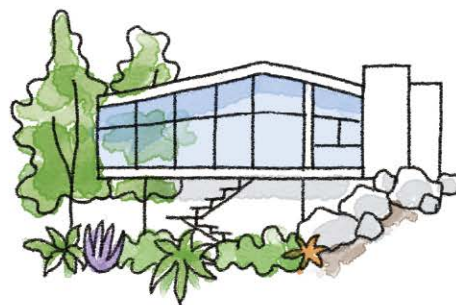
まわりの植物と一体になる家

リナ・ボ・バルディ
ブラジル、サンパウロ
1951年



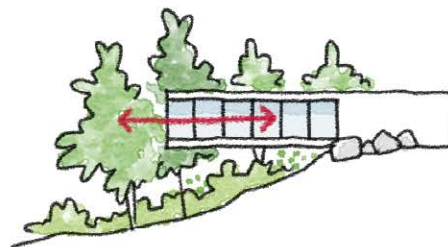
目の高さに
緑が見えるよ

ちゅう
宙に
ういているよ



POINT

ななめの土地を利用して、床を半分うかせることで、まわりの植物が目の高さに合うように計画されています。



設計したのはイタリア生まれで、ブラジルにうつり住んだ建築家。彼女はブラジルの自然や文化を大切に思っていました。この家はもともと植物が少ない土地に建てられましたが、まわりに自分で植物を植え、緑と一体となる家をつくりました。

かんきょう

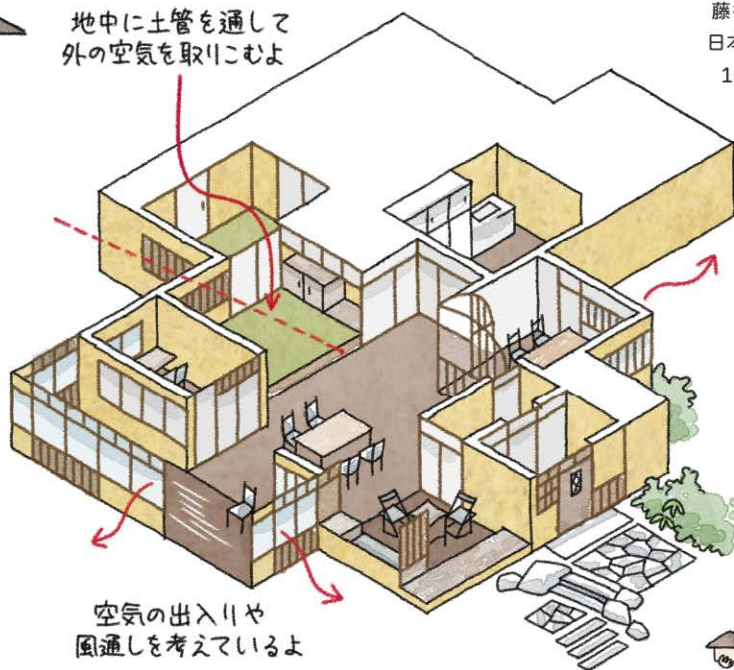
環境とともにくらす日本の家

藤井 厚二
日本、京都
1928年



POINT

イスと畳にすわる人の目の高さを合わせるため、畳がしかれた場所が高くなっています。その足元を利用して、外の空気を取りこんでいます。



明治時代、日本にイスや電気を使う外国のくらしが入ってきました。この家は、西洋式の新しいくらしに合わせて、日本の家の形にさまざまな工夫を加えて建てられました。また風や光を取りこむことで理想の日本の家を目指しました。

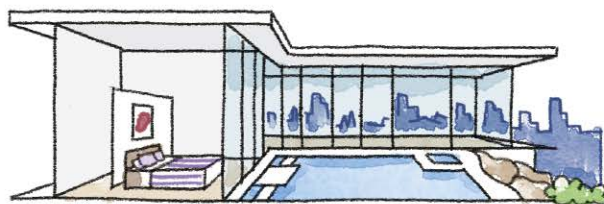


◆ ピエール・コーニッグ

◆ アメリカ、カリフォルニア州ロサンゼルス

◆ 1960年

橋をわたって
子ども部屋へ行けるよ



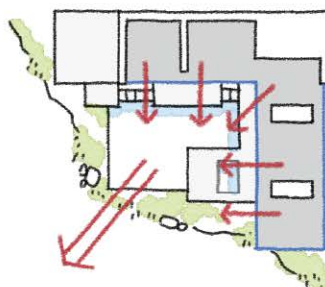
風景とつながる 開放的な家

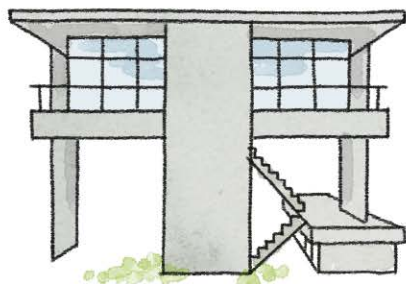
POINT

プールのまわりをL字でかこうことで、あらゆる部屋からプールがながめられるようにつくられました。

開放的なアイランド
キッチンがあるよ

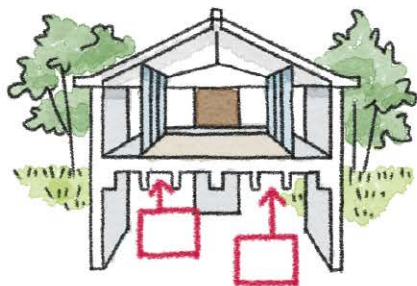
戦後、アメリカでは住宅不足が問題になっていました。そんな中、手に入りやすい材料を組み合わせることですぐに建てられる家として、この家は設計されました。鉄骨やガラスを使った開放的な空間は、カリフォルニアの気候や風景に合ったくらしを生み出しました。





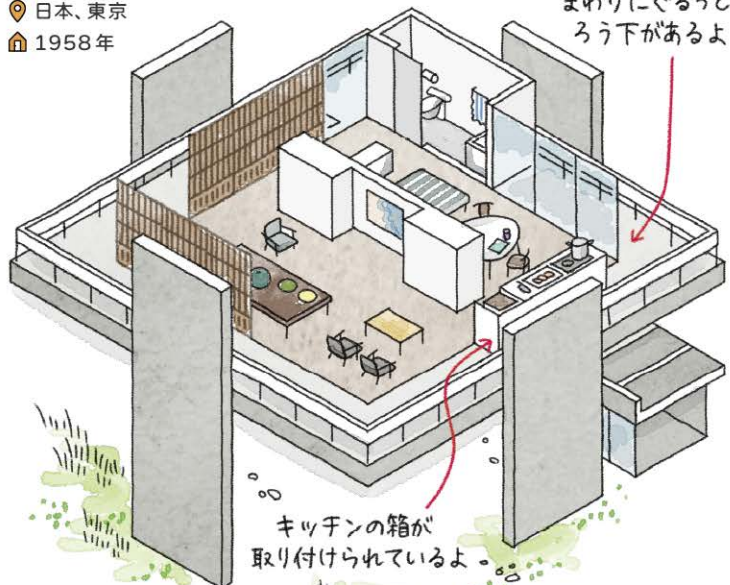
POINT

地面からうかぶようにつくられた家です。キッチンや子ども部屋はつけはしができる「ムーブネット」という仕組みになっています。



くらしに合わせて
すがたを変えてきた家

菊竹 清訓、菊竹 紀枝
日本、東京
1958年



まわりにぐるっと
ろう下があるよ

キッチンの箱が
取り付けられているよ

日本の経済が大きく発展していたころ、建築も生きもののように成長したり変化したりする必要があるという「メタボリズム」という考えが生まれました。家族やくらしの変化に合わせてすがたを変えてきたこの家には、その考え方がよくあらわれています。

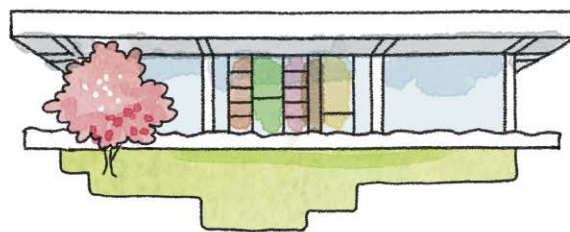
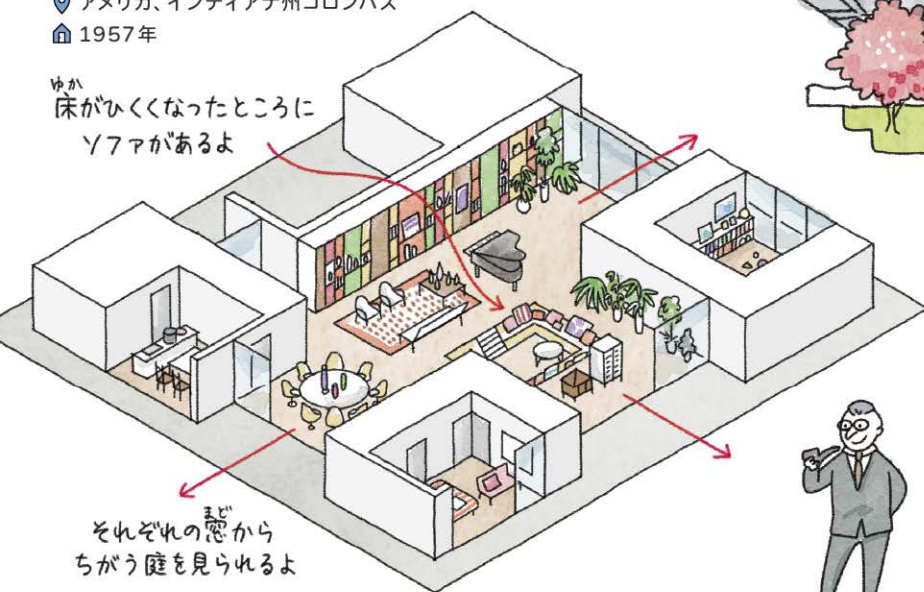


庭と家具と一体でデザインされた家

エーロ・サーリネン、アレクサンダー・ジラード、ダン・カイリー
アメリカ、インディアナ州コロンバス
1957年

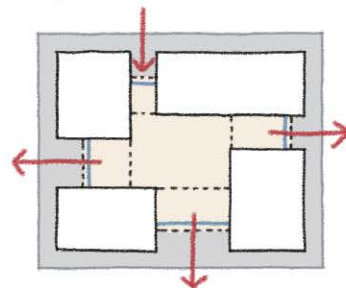
ゆが
床がひくくなったところに
ソファがあるよ

それぞれの
ちがう庭を見られるよ



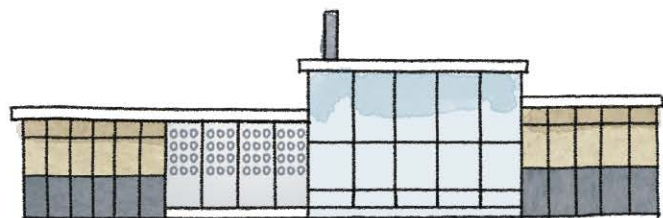
POINT

真ん中に家族が集まるリビング、そのまわりに7人家族の部屋やキッチン、お風呂などがつくられました。



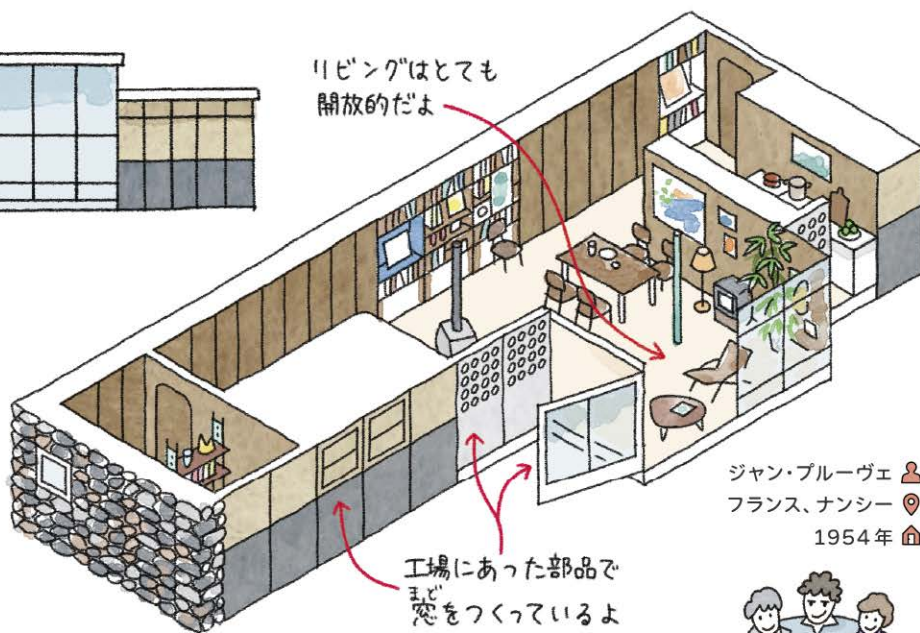
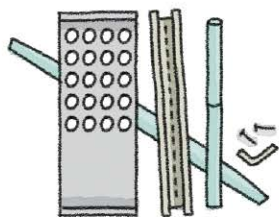
この家はリビングを中心に、9つのエリアに分けることができます。それぞれのエリアからの景色の見え方を考えながら庭がデザインされていて、家具やカーテンなどの布地もエリアや庭に合わせてデザインされました。

ありあわせの材料で組み上げた家



POINT

設計者が工場にあまっていた部品でつくった、自分の家です。



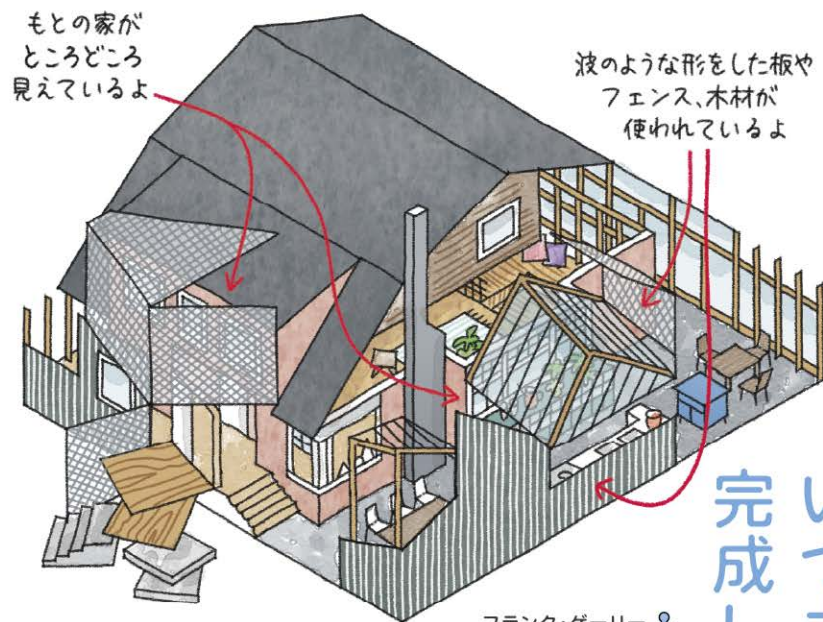
リビングはとても開放的だよ

工場にあった部品で
窓をつくっているよ

ジャン・ブルーヴェ
フランス、ナンシー
1954年

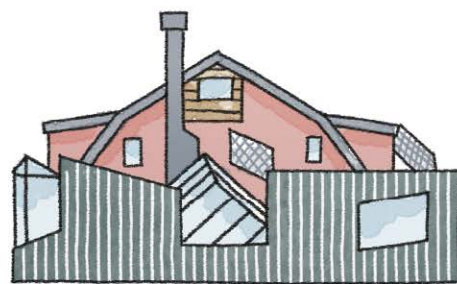


かつて部品工場を^{けいらい}経営していたこの家の設計者は、工場にあった物を材料にして、仲間や家族とともに家をつくりました。彼は建築を専門的に学んではいませんが、材料や加工方法のことはよく知っていて、その知しきやアイデアがいかにされています。



もとの家が
ところどころ
見えているよ

波のような形をした板や
フェンス、木材が
使われているよ



POINT

もともとはどこにでもあるような家でしたが、いくつかの安い材料をバラバラに組み合わせることで、見たことのない形になっています。

いつまでも
完成しない家

この家は、もとあった家の壁や天井をはずしたり、新しい材料をつけ足したりして、いつまでも完成しない家としてつくられました。空が見えるなめの窓や、家の中にある昔の壁は、外と中、昔と今がまざりあった空間をつくっています。

フランク・ゲーリー
アメリカ、カリフォルニア州サンタモニカ
1978年

